

# ハーバード大学美術館所蔵「春日本万葉集・春日懐紙」について

On "Kasuga Kaishi" with Kasugabon Manyoshu on its back" in the collection of Harvard Art Museums

安達直哉

Naoya Adachi

## はじめに

平成二十年度から二十四年度までの科学研究費補助金「基盤研究B（海外学術調査）」による「アメリカ収蔵『書跡』の基礎データ収集と整理のための調査研究」という研究課題のもと、研究代表者河内利治教授とともにボストンやワシントンの博物館等で日本や中国の書跡に関する調査を実施した。ここでは多くの新知見と課題を見出すことができたが、本稿では、そのうち興味深い資料一点について報告しておきたい。

ハーバード大学美術館に、料紙の表に春日本万葉集と呼ばれる万葉集の写本、裏に春日懐紙と呼ばれる懐紙類が残されているものがある。そこでまず春日本万葉集と春日懐紙について概観しておきたい。

## 一、春日本万葉集と春日懐紙について

春日本万葉集とは、春日若宮社の神主であった中臣祐定が寛元元（二年（一二四三）四四）に万葉集を写したものである。本文は押界に一面九行、歌はほぼ一首一行で、真名書きである。ちようど奥書のある部分が現存しているので、書写年が確定する。田中大士氏の研究によれば、現在までに一三四枚分が確認されている。そのうち一二三枚は裏に春日懐紙があるものであるが、万葉集が完全に近い形で残っているのは二三枚のみである。ほかに裏に書状があったり、白紙であったり、あるいは不明であったりするものが十一枚である。

次に春日懐紙とは、鎌倉時代前期に奈良の春日社の神官や僧侶な

どが詠んだ和歌が書かれた懐紙である。現在までに一四九枚が確認されているが、そのうち一二三枚は裏に春日本万葉集が写され、残り二六枚は万葉集面が不明の分である。

この二つの資料が表と裏に書かれ、伝来した事情は次のようである。<sup>③</sup>初めに懐紙の方が書かれ、束ねられて保管されていたものである。続いて裏面を利用するために、まず懐紙の面を内側にして真ん中で折り、袋綴じの冊子とした。その際に、懐紙類の大きさはバラバラであったので、下辺などを切断して大きさを統一した。この時点では白紙の面が外側になるので、そこに万葉集が写された。確かに現存するものは、真ん中に折れ目が見え、左右に綴じ穴が残されている。

ところが、その後内側にある懐紙の方がより重要だと考えられ、この冊子の綴じを解いて懐紙を表に戻して保管した。しかし、その際に裏の万葉集が表から見ることがあり、懐紙の鑑賞に邪魔になるので、その万葉集の面を相剥ぎして文字を削除した場合があった。伝来については、<sup>④</sup>もともと加賀藩の前田家に伝わったものが、関戸守彦氏や松岡三次氏、大鋸彦太郎氏等に伝わり、その中から現在は国文学研究資料館や石川県立歴史博物館にまとまって所蔵されているものがある。

近年これらの価値が認識され、平成二十一年に石川県立歴史博

物館所蔵のもの十七枚、翌年には国文学研究資料館の所蔵のもの二十二枚が国の重要文化財に指定された。<sup>⑤</sup>

## 二、ハーバード大学美術館所蔵の春日本万葉集・春日懐紙

平成二十二年八月二日と三日にボストンのハーバード大学美術館で調査した時に、箱書に「春日本萬葉集断簡寛元元年又は二年寫中臣祐定筆紙背に春日懐紙三枚あり」とある一巻の巻物（分類番号一九七四・八三）があった。表の第一紙と第二紙に万葉集の文章があり（第三紙は文章が削りとられる）、裏には懐紙三枚分が残されていた。

まず書誌情報から述べる。①一枚分の紙の大きさは、二一八・三×四三・〇cmあるいは二一八・三×四三・一cmである。②懐紙のほぼ中央に折目が認められる。③左右に綴じ穴が合計六個確認される。④下辺が切断され、懐紙の署名部分では肝心の名前の部分が切れている。⑤裏の懐紙から見ると、万葉集の方には押界線が確認される。その界高は二五・八cm、界幅は二・四cmである。⑥万葉集は一面九行で書かれている。⑦万葉集の筆跡もすでに知られているものと同じである。⑧片仮名訓がある。⑨第三紙目は確かに表面の万葉集が削除されている。⑩第三紙の末に「月明荘」（一・三×〇・六cm）という朱

文印が捺されているのが見えるが、これは古物商として知られ東京都文京区在住であった反町茂雄氏の印である。さらに軸付紙に「拜土藏書」(一・八×〇・七cm)の印文のある朱文印がある。この印については、すでにポール・S・アトキンス氏が指摘されるように<sup>6)</sup>、日本書跡の収集家であったドナルド・F・ハイド夫妻の印である。⑩附属品として桐箱がある。箱表の墨書は前記のとおりであるが、箱裏に「弘文荘」の印文のある朱文印が捺されている。

次に内容についてみてみよう。万葉集の文章は、第一紙が巻五所収の「籠妙能布衣遠陀尔伎世難尔」の歌(九〇一番)から「世人之貴慕七種之」の歌(九〇四番)の「安我古登婆」までである。第二紙は、巻八所収の伴家持の歌「皇之御笠乃山能黄葉」の和歌本文(一五五四番)から同じく家持の歌「聞津哉登妹之問勢流雁鳴者真毛遠雲隠奈利」(一五六三番)までとなる。なお料紙の右上に「八廿一」という墨書がある。第三紙は削除されていて詳細は不明であるが、文字の一部が残されている。料紙の右上にある「七ノ九」という墨書を手懸りにすると巻七の一部であることが推定される。最初の二行分は文字が残っていないが、三行目の最初が「皆人」、四行目の二から四文字目が「乃和太」、五行目一文字目が「皇」、下部に「吾反将見」、六行目は四文字目が「石」、そのほかに「成」や「左右」、七行目一文字目が「山」、八行目一文字目が「氏」、下の方に「人舟

召音越乞」が不鮮明ながら読みとれる。九行目一から四文字目が「氏河尔生」、七文字目から「乎河早」、下の方に「家里」、十行目一文字目は「氏」、真ん中あたりに「今」、十一行目冒頭は「氏河」、真ん中に「雖」下部に「音」や「不」、十二行目冒頭は「千草人氏」、七八文字目に「乎清」、末に「難為」など、十三行目は二・三文字目は「津作」、十四行目最初は「志長鳥」他に「間山」「者無」、十五行目一文字目に「一」、七・八文字目は「浦廻」、十六行目真ん中あたりに「赤駒」、他に「活」や「流」、十七行四から七文字目に「吉石流垂」、十八行真ん中あたりに「手鳴」、下の方に「水」「早見」が見える。以上によりこの第三紙は「芳野作 神左振磐根己凝敷三芳野之」(一一三〇番)から「作夜深而穿江水手鳴松浦船」の歌(一一四三番)の最後までが書かれていたと推定できる。

このうち第一紙と第二紙の図版は『弘文荘春日本萬葉集・春日懷紙等展観図録』<sup>8)</sup>に掲載(1,7)されているが、いずれもまくりの状態で、卷子にされてはいない。なお第三紙は掲載されていない。一方現在裏面になっている懷紙について述べておこう。第一紙裏には「詠二首和哥」として「木工権助泰□」の署名があり、続いて「枕邊鶯」の題で「あさまたき」の歌から始まる。筆者については、他の春日懷紙にみられる役職名や筆跡と比較すると、大中臣泰尚と推定される。第二紙裏は「詠二首和哥」として「兵庫助中臣祐□」の

署名があり、続いて「初雪」の題で「これもまた」の歌から始まる。筆者は、他の春日懐紙にみられる役職名や筆跡から中臣祐方<sup>(10)</sup>と判明する。本懐紙の「祐」の下の文字は一部見えているが、「方」の上部として差し支えない。第三紙裏は「詠三首和哥」として「主殿助□□」の署名があり、続いて「春情在花」の題で「ひとすちに」の歌から始まる。主殿助は『墨美』一九七号所載の懐紙類に主殿助時助の懐紙があり、筆跡も同筆と認められるからこの第三紙も主殿助時助の懐紙であるとみられる。

これらの懐紙も大中臣泰尚と中臣祐方の懐紙は『弘文荘春日本萬葉集・春日懐紙等展観図録』に掲載されているが、主殿助の懐紙は掲載されていない。

伝来については、これら三枚はハーバード大学美術館の分類番号により一九七四年（昭和四九）に同美術館に寄贈されたことが判明する。さらに先述の印により、同美術館に入る前は、ドナルド・F・ハイド夫妻、その前は反町氏の所蔵であったことも判明した。それ以前は、反町氏の著書『一古書肆の思い出』<sup>(11)</sup>五によると、「ついに春日本『万葉集』も、全部十九枚かをとりまとめて、譲ってくれました。」とあり、金沢の郷土史家大鋸彦太郎氏所蔵であったことが判明する。確かに懐紙三枚の筆者のうち中臣祐方、大中臣泰尚の懐紙は大鋸氏旧蔵本のみには残されていない。<sup>(12)</sup>

そこで伝来をままとめると、もと加賀前田家にあったものが流れて、昭和三十八年（一九六三）に大鋸氏が紙くずの中から見出し、その後大鋸氏が反町氏に売ってさらに反町氏がドナルド・F・ハイド夫妻に売却し、ハイド夫人がハーバード大学に一九七四年に寄贈したものとなる。

### 三、「石川県立歴史博物館蔵春日懐紙・春日本万葉集」との比較

このハーバード大学所蔵資料とすでに重要文化財に指定されている石川県立歴史博物館所蔵品<sup>(13)</sup>とを比較したい。すると、一枚分の紙の大きさは、重文になっているものが、二八・五×四三・〇cm、あるいは二八・三×四二・八cmほどで、こちらは二八・三×四三・〇cmではほぼ同じである。ほかには、懐紙のほぼ中央に折目が認められること、左右に綴じ穴が六個確認されること、下辺が一部切断されていること、万葉集の方には押界線が引かれ、一面九行で書かれていること、片仮名訓があること、万葉集が削除されていることは両方の所蔵品とも同様である。さらに万葉集の筆跡も同じであり、懐紙の中臣祐方と大中臣泰尚の筆跡も両所蔵品ともに同筆と認められる。このようにハーバード大学所蔵の三枚はすでに重文となっているもののツレであることは間違いない。懐紙の方は、大中臣泰尚、中

臣祐方、主殿助時助の懐紙ということで、いずれも大鋸彦太郎氏旧蔵本の特徴を備えている。一方、万葉集の方は巻五・巻七・巻八の一部であることが確認できた。

## むすびに

以上のことにより、この調査の成果というべき点を二つ挙げておきたい。まず、これは現在知られている春日懐紙・春日本万葉集に新たな実例を一枚加えたことにある。もちろんアメリカでは周知であったのかもしれないが、わが国ではその内容等初めて知られるものである。また、反町氏が大鋸氏から購入した分がどこに流出したか分からなかったのであるが、その一部がハーバード大学美術館で確認できたことになる。

## 註

- (1) 科学研究費基盤研究B〔海外学術調査〕研究報告書『アメリカ収蔵「書跡」の基礎データ収集と整理のための調査研究』
- (2) 田中大士「春日本万葉集の完全に残る例―付春日懐紙の総数再考―」『汲古』五七 平成二十二年
- (3) 田中大士「石川県立歴史博物館蔵春日懐紙・春日本万葉集解説」『石川県立歴史博物館紀要』二一 平成二十一年

(4) 田中大士「春日懐紙(春日本万葉集)の来歴」

『汲古』三九 平成十三年

(5) 文化庁の国指定文化財等データベースによる。

(6) ポール・S・アトキンス「アメリカの明月記―ハーバード大学付属サックラー美術館蔵嘉禄二年九月巻」『明月記研究』一〇 平成十七年

(7) 佐々木信綱ほか編『校本万葉集』新增補版一一(岩波書店 昭和五十五―五十六年)が読みとれるとした文字とは若干の相違がある。

(8) 『弘文荘春日本万葉集・春日懐紙等展観図録』昭和三十八年か。

(9) 註(3) 論文掲載の図版6や註(7) 書掲載の図版10参照。

(10) 註(3) 論文掲載の図版7参照。『弘文荘春日本万葉集・春日懐紙等展観図録』では中臣祐有とするが正しくない。

(11) 反町茂雄「一古書肆の思い出」五(平凡社 平成四年)七十二頁。

(12) 註(4) 論文参照。

(13) 註(3) 論文掲載の図版による。

(付記) 本稿を作成するにあたり、ハーバード大学美術館の方々には閲覧に際して一方ならぬお世話をいただいた。また国文学研究資料館田中大士教授にも御助言を頂いた。さらに积文については、大東文化大学文学研究科後期課程高田智仁氏に原案を作成していただいた。いずれもここに深謝申し上げる。

また本稿は平成二十年度から二十四年度までの科学研究費補助金「基盤研究B（海外学術調査）」による「アメリカ収蔵『書跡』」の基礎データ収集と整理のための調査研究」の成果である。

【釈文】

（第一紙）万葉集卷第五雜歌 No九〇一～九〇四途中

麗妙能布衣遠陀<sup>(余)</sup>尔伎世難尔可久夜歎敢世牟周弊遠奈美

水沫奈須微命母榜繩能千尋<sup>(余)</sup>尔母何等暮久良志都

倭文手纏數母不在身尔波在等<sup>(余)</sup>尔母何等意母保由留加母

去神龜二年作了但以類故更載於茲

天平五年六月丙辰朔三日戊戌作

戀男子名古日譚三首<sup>長二首</sup>

世人之貴慕七種之寶毛我波何為和我中能產礼出有

白玉之吾子古日者明<sup>(星)</sup>皇之開朝者數多倍乃登許能邊佐良

受立礼杼毛居礼杼毛登母尔戲礼夕皇乃由布弊尔奈礼

婆伊射<sup>(祢)</sup>余登乎平多豆佐波里父母毛表者奈佐我利三枝之中<sup>(尔)</sup>

乎祢乎登<sup>(余)</sup>登久志我可多良倍婆何時可毛比等等<sup>(等)</sup>奈理伊弓天安志家

口毛与家人見武登大船乃於毛比多能無<sup>(尔)</sup>尔於毛波奴尔横風

乃尔布敷可尔布敷可尔覆来礼婆世武須便乃多杼<sup>(佐)</sup>枝乎之

良尔志路<sup>(尔)</sup>（多倍乃）多須吉乎可氣麻蘇鏡弓尔登利毛知弓天神<sup>(阿)</sup>何布藝

許比乃美地祇布之弓額拜可加良受毛可賀利毛神乃末尔麻尔<sup>(尔)</sup>等立

阿射里我例乞能米登須與毛余家久波奈之尔漸々可多知

都久保里朝々伊布許登<sup>(等)</sup>夜美靈尅伊乃知多延奴礼立乎杼利足

須里佐家婢伏仰武祢宇知奈氣吉手尔持流安我古登婆

（第二紙）卷第八春雜歌 No一五五四～一五六三

「八廿一」

皇之御笠乃山能秋黄葉今日之鍾礼尔散香過奈牟

安貴王歌一首

秋立而幾日毛不有者此宿流朝開之風者手本寒母

忌部首黑磨歌一首

秋田苺借盧毛未壞者鴈四寒霜毛置奴我二

故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首

明日香河遊廻<sup>(通)</sup>岳之秋芽子者今日者零雨尔落香過奈牟

右一首丹比真人國人

鶉鳴古郷之秋芽子乎思人共相見都流可聞

秋芽子者盛過乎徒尔頭判尔不捶還去牟跡哉

右二首沙弥尼等

大伴坂上郎女跡見田庄作歌二首

妹目乎始見之埼乃秋芽子者此月其呂波落許須莫湯目

吉名張乃猪養山余伏鹿之孀呼音乎聞之登聞思佐

巫部麻蘇娘子鴈歌一首

誰聞都從此間鳴渡鴈鳴乃孀呼音乃之知(左)左守(右)

大伴家持和歌一首

聞津哉登妹之間勢流鴈鳴者真毛遠雲隱奈利

(第三紙) 卷第七雜歌 No 一一三〇～一一四三

「七ノ九」

芳野作

神左振磐根已凝敷三芳野之水分山乎見者悲毛

皆人之戀三芳野今日見者諾母戀來山川清見

夢乃和太事西在來寤毛見而來物乎念四念者

皇祖神之神宮人冬薯蕷葛弥常敷余吾反將見

能野川石迹柏等時齒成吾者通万世左右二

山背作

氏河齒与杼湍無之阿自呂人舟召音越乞所聞

氏河尔生菅藻乎河早不取來余家里裏為益緒

氏人之譬乃足白吾在者今齒与良增木積不來友

氏河乎船令渡呼跡雖喚不所聞有之櫂音毛不為

千早人氏川浪乎清可毛旅去人之立難為

攝津作

志長鳥居名野乎來者有間山夕霧立宿者無而

一本云猪名乃浦廻乎榜來者

武庫河水尾急嘉赤駒足何久激沾祁流鴨

命幸久吉石流垂水々乎結飲都

作夜深而穿江水手鳴松浦船梶音高之水尾早見鴨

\* ( ) 内文字は日本古典文学大系本との異同を示す。

(紙背第一紙)

詠二首和哥

木工權助泰

枕邊罵

あさまたきまくらになる、うく

ひすのたよりうれしき

のきのむらたけ

崗残雪

かすみたつをかへにのこるしら

ゆきのきえすハありとたのむ

つきかは

(紙背第二紙)

詠二首和哥

兵庫助中臣祐□

初雪

これもまたいとほむものかいこま

やまゆきふりそむるミねのよ

こくも

冬恋

わすらるゝうきミわかハのうす

こほりさすかに世にもき<sup>え</sup>ゑは

てぬかな

(紙背第三紙)

詠三首和哥

主殿助□□

春情在花

ひとすちに花に心はと、ま

りてはるおわすれぬ身と□

なりぬる

見花忘帰

さくら花にほふ山ちハすき□

うくてかへるこゝろそわす

られにける

花飛似雪

さへぬよの雪かとそみるみや